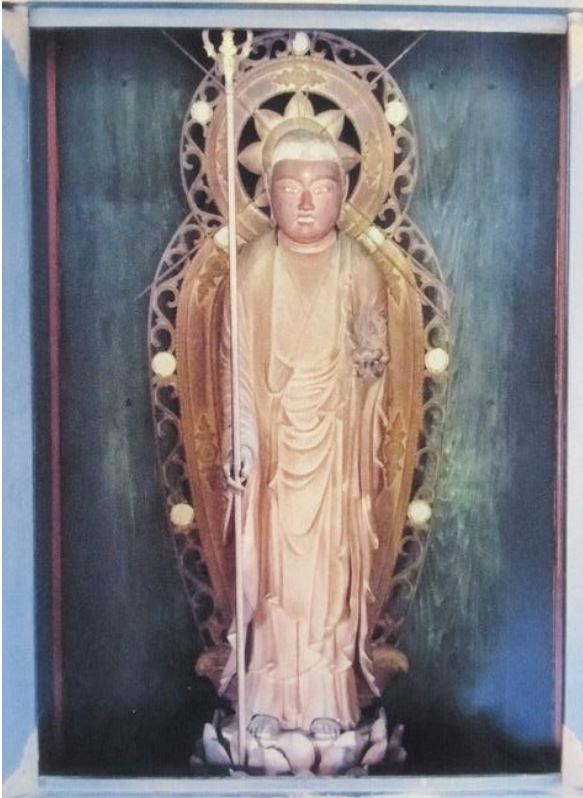


市町村指定文化財取材票 《表》					
取材日	2024年	7月	2日	(記入者) 本井良明	
取材参加者	石井	井本	西田	宮本	本井
	横山				
取材対象先	奈良市：西大寺奥の院（法界鉢性院）の木造地藏菩薩立像				
所在地	奈良市西大寺野神町 1 丁目6-10				
所有者（取材 対応者）名	西大寺（足立真傳僧侶様） （個人情報守秘）		連絡先		
			PCアドレス		
取材申込	申込先・行政名など：西大寺 足立真傳僧侶様				
市町村 指定文化財	彫刻	1 軀	木造地藏菩薩立像（厨子入）附 像内納入品 一括 2024（令和6）年3月27日指定		
	建造物	棟	名称（指定年月日）		
文化財指定理由	本像は、像内納入品と頭部の墨書名から、1514（永正11）年に海龍王寺の仙算と番匠宿院源四郎によって造立され、1546（天文16）年に宿院仏師源次によって頭部が補作されたことが分かる。像内から仏舎利、毛髪、文書類、旧頭部とその表面を削った薄片、錫丈頭が確認されている。制作時期及び作者が明らかな室町彫刻の基準作で、頭部の補作時期が判明する点でも重要。宿院仏師の歴史を考える上で注目すべき仏像であり、当時の地藏信仰の様相が分かる多数の像内納入品を伴う点でも注目されている。				
文化財の状況					
防火対策	設備・対策・点検・通知方法など			記入者の感想	
	多数の文化財を所有しており防火対策は万全である。			特になし。	
獣害対策	被害の有無、対策など			記入者の感想	
	住宅地の中にあり、獣害はない。			特になし。	
保存～継承 へ 苦労と 今後の課題 と対策	西大寺は、2府14県の真言律宗の寺院86ヶ寺（うち奈良県37ヶ寺）の総本山である。西大寺奥の院（法界鉢性院）は西大寺の塔頭の一つで寺院名は「体性院」である。住職は西大寺住職の松村隆誉（りゅうよ）第72世長老（真言律宗第9代管長）であるが、体性院を管理担当しているのは足立真傳様（西大寺の役職名は責任役員）で、縁あって昭和58年頃に当時の体性院の管理責任者の秋本不傳様に仕えることとなり、その後、その後任として40年近く体性院を守ってこられた。体性院は、周囲の住宅街よりも小高い、見晴らしの良い場所にあり、興正菩薩の五輪塔を中心にして庭、植栽も綺麗に維持されている。地藏菩薩像が安置されている本堂も綺麗に管理されており、本寺も含めた維持管理のための西大寺の皆様のご尽力を感じた。一方、西大寺は檀家をもたないお寺であり、著名なお寺であるが維持・管理の財源の捻出に苦労があるとお話があった。				
取材を終えて感じた文化財保護状況と今後の課題（修復、維持、管理、環境など）					
本件取材は、急遽のアポ取りとなったにもかかわらず、偶々足立真傳様とお会いすることが出来、その場でアポ当日の取材を快く引き受けていただいた。しかも、奥の院まで案内していただき、本堂では、足立様が我々のためにお経を唱えていただき、さらに、約2時間の長時間にわたり、由緒やご苦労された話などをいろいろお話し下さった。その中でも、「人の縁を大事にする、ご縁のあった人が困っていたら助ける、助けられたら感謝し御礼の言葉を返す」というお話は心に残った。最後に、今後の保存継承に向けたお考えをお聞きすると、「西大寺は、篤く仏教を信仰した聖武天皇の後を継いだ称徳天皇が創建された寺であり、また、西大寺の中興の祖の観尊興正菩薩は、晩年、仏教興隆に努めた聖徳太子が建立した四天王寺の住職に、宗派が違ってもかわらず請われて就任した。今後とも、こうした聖徳太子、聖武天皇、興正菩薩の系図を守っていくという気持ちで日々勤めていく。後継もご縁のあった人をお願いしたい」とお話されたことも、心に残った。					

市町村指定文化財取材票《裏》					
取材日	2024年	7月	2日	(記入者) 本井良明	
取材参加者	石井	井本	西田	宮本	本井
	横山				
取材対象先	奈良市：西大寺奥の院（法界鉢性院）の木造地蔵菩薩立像				

<木造地蔵菩薩立像の画像使用許可済・建物等写真撮影許可済>

文化財指定名 木造地蔵菩薩立像（厨子入）附 像内納入品 一括	
木造地蔵菩薩立像（西大寺所蔵）	奥の院 本堂
 木造 像高93.9cm	 興正菩薩 五輪塔 
文化財の由緒などを記入	所有社寺や地域（廃寺等）の歴史や特徴を記入
1514（永正11）年に本像を造立した海龍王寺比丘仙算は彫刻の技量に長けた造仏僧で、宿院番匠源四郎たちを率いて造仏活動を行った。また、頭部を補作した源次は、源四郎の工房を引き継ぎ、宿院仏師と名乗って新興の仏師集団の棟梁となった。本像は、法衣の上に袈裟を着け、その着衣形式は鎌倉・南北朝時代の南都の地蔵菩薩像に倣っている。両袖や腹前の衣の皺は彫り口が深く繁縷な傾向を示しており、仙算の造形感覚によるものとみられる。一方、頭部は、肉取りの抑揚の少ない丸い顔が特徴で目鼻立ちがよく整っており、なかでも目尻の吊り上がった見開きの強い眼には源次の特色が表れている。	当院は、興正菩薩叡尊上人が1290（正応3）年に90歳で遷化し、荼毘に付された地に営まれた御廟所である。本堂は、江戸中期の建造である。南門正面には、二重基壇の興正菩薩廟塔（石造大五輪塔＝総高342cm）がある。他に境内には第2代慈真和上、第3代宣瑜上人、第64代弘澄上人や諸長老の五輪塔もある。また、隣接地には近世以来の村墓地があり、その入口近辺には中世の葬送習俗を伝える室町時代の木造瓦葺の骨堂（こつんどう）があり、民俗学的に貴重な建造物で県指定文化財である。現在でも、毎年の光明真言会結願後に当年に亡くなった一門僧侶の板塔婆が外周に打ち付けられる。毎年7月23日に本尊地蔵会式を執行している。（西大寺・鉢性院縁起沿革参照）